

気がついたら哲学者

カール・ライムント・ポパー

親愛なる稲盛理事長、稲盛財団の皆様、そしてご列席の皆様。

まず最初に、第8回京都賞を受賞した私たちのためにお集まりくださったことを感謝いたします。今日という日は疑いなく、私たち3人の人生でも最も素晴らしく幸福な日の一つです。

受賞者は各自二回の講演を行うことになっていますが、今日はその第一回目です。二回目の講演では各自の専門分野に関連があることをお話しするように言われていますが、一回目の今日は私たちの人生の理念と、どのような経緯で今の専門分野に関心と野心を抱くようになったか、についてお話しするようと言われております。

しかし私の場合、残念ながら話の内容がご希望と異なるものになってしまうことをあらかじめお断りしておいたほうがよいでしょう。私は哲学者として、皆さんの前に立っています。また、英国でも外国でも私は哲学者として知られています。名誉ある京都賞も「20世紀の哲学思想」という分野に対して授与されたものでした。しかし、これまでの長い人生において私は「哲学者になりたい」とか「哲学を研究したい」などと思ったことは一度もありませんでした。また、生涯一度も自分を哲学者であるという満足感で見たこともありません。一部の職業的哲学者もそうですが、世間の人々が私を哲学者の範疇に含めるのならば、それは私が計画したものでもなければ、意図したことでもありません。

もちろん私にも将来の職業を決めなければならない時期はありました。私はさんざん迷った末に、教師になろうと決めました。最初は小学校教師になりたいと思いましたが、後には中等学校で数学、物理学、化学、生物学を教えたいと思うようになりました。これが私の目標でした。この目標を念頭に、1918年に16歳で学校を卒業し、ウィーン大学のいわゆる「特別」学生として数学と物理学とを学びました。3年後には「一般」学生になり、さらに7年後の1928年には哲学の博士号と数学、物理学、化学、生物学の教員免許を取得しました。

しかし、私の博士論文は心理学分野に関するもので、児童心理学者のカール・ビューラーの指導を受けました。理由は二つあります。第一に私は教育に関心

があり、そこから心理学にも興味を持つようになりました。第二に私はこの分野に独自の考えを持っていました。博士号を取得するにはこれで十分だと思いました。逆に私は、数学と物理学の分野のほうを非常に高尚な学問と位置づけていたので、これらの不思議で難解な分野では独自の考えを展開できるはずがないと思っていました。しかし、もし私に勇気があって、教師になることを目標としていなかったならば、私は物理学や数学を研究対象にしていたことでしょう。

念のために申し上げますと、数年後には物理学や数学の分野でもいくつか独自の考えを持てるようになりました。数学では、主として確率論の公理化で、格子理論と呼ばれる分野では例えば、相対尺度を規定する半格子 [格子点、semi (meet) lattice] があれば、この半格子は接合を規制しながら分布状になるということを、私は立証しました。これは確率論、格子理論、そして量子物理学の各分野で関心を持たれている定理でした。物理学では量子力学の分野でいくつか新しい考えを持つようになりました。量子力学は私が博士号を取得するわずか1年前に、ヴェルナー・ハイゼンベルクが提唱した新しい理論でした。ハイゼンベルクの理論の発表は極めて重要なものでした。しかし、後のエルヴィン・シュレーディンガーの波動力学の出現で、ハイゼンベルクの理論は影が薄くなったように見えました。波動力学はハイゼンベルクの量子力学とはかなり様相を異にしていますが、導き出す結論はほとんど同じで、波動力学のほうがより直観的なアプローチでした。1935年に私はハイゼンベルクとシュレーディンガーに会いました。シュレーディンガーとは1961年に亡くなるまで親交を続け、彼の家族とは今でも親しくしています。

ここで少し休みましょう。私がさまざまな分野で研究を行ったため、各分野の創造的な指導者が必要とするような専門知識を身につけることができたことが、おわかりいただけると思います。しかし、これらの分野で何年間も熱心に研究活動を続けながら、自分自身では指導的立場というものについて、とやかく考えたことはありません。私が研究を行ったのは、これらの分野に興味をひかれ、興奮を呼び起こされたからにすぎません。さらにいつの日か、この興味と興奮を生徒たちにも教えてやりたいと思っていました。それにヒトラーの台頭以前に、私は大学教師になることなど夢にも思っていなかったのです。ですから、私にしてみれば「むやみに多くの分野を対象にして能力を無駄遣いしていた」わけではありませんでした。しかしながら、いずれの分野で発見者か研

究者として、あるいは科学界の指導者としてのキャリアを目指していたならば、10もの異なる分野を研究対象とする姿勢は、常軌を逸したものでした。しかし私はそうした野心を抱いていたわけではありません。少なくとも、ずっとあとの1934年末に『科学的発見の論理』がドイツで出版されるまではそうでした（出版の1年前にヒトラーがドイツの指導者となったことは興味深いことです）。

やたらと多くの分野を研究対象にしているという話をしましたが、そうなるともう一つ白状しておかなければならないことがあります。私は音楽一家の生まれです。母方の祖父母はウィーン楽友協会の共同創立者でした。19世紀半ばに同協会によって建てられたウィーンの楽友協会ホールは世界で最も有名なコンサートホールとして長年親しまれてきました。このホールは主としてベートーベンの交響曲を演奏するために設計されたものです。私は16歳のとき、ヨハン・セバスチャン・バッハを手本に作曲を始めました。曲のほとんどは失われてしまいましたが、残った曲の一つ、オルガンのためのフーガは作曲後約70年も経った今年7月、スペインのマドリード近郊のエスコリアル宮殿で公開初演されました。

ここで再び、私が哲学者としてここに立っている、という事実を申し上げておかなければなりません。私が研究した数ある学問の中で、哲学の研究についてはまだお話をしていませんので、今度は哲学の研究についてお話ししようと思います。

私が初めて哲学的質問をしたのは、7～8歳の頃だと思います。私は父に無限の概念と宇宙の無限性について説明してくれるよう頼みました。私は無限性を理解することは不可能に思えるから説明が欲しい、と父に言いました。父は二人いる彼の兄弟の一人に聞け、と言いました。叔父は現実、すなわちカントルの無限に対比させて、潜在力、すなわちアリストテレスの無限と技術的に呼ばれるものが何かということ、本当にわかりやすく説明してくれました。叔父の説明に私はだいたい満足しましたが、カントルの無限については今も少し混乱しています。

それからはさまざまな哲学的問題にぶつかりました。10歳のときには「人生とは何か」という問題に取り憑かれ、自分自身とクラスメートに、人生とはろうそくのごとき酸化のプロセスである、という答えを示しました。あとでわかったことですが、最初にこれと同じ解答に達したのはエフェソスのヘラクレイトスでした。父の書齋にたくさんあった哲学書を読む前から、私は哲学的

問題のとりこになっていました。最初に読んだ父の哲学書はカントの『純粋理性批判』でしたが、理解は困難でした。一語も理解できませんでした。どのような問題を扱ったものか見当もつきませんでした。しかしすぐに私は、父の書齋にカントの『純粋理性批判』を解説した別の書物があることを知りました。ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』がそれです。私の記憶が正しければ、これは私が読んで研究した最初の哲学書ということになります（少なくとも初めて読んだ哲学の大著です）。

ショーペンハウアーは難しいものでしたが、多くを学ぶことができました。私はショーペンハウアーとカントを読み続けました。カントが読めるようになると、ショーペンハウアーよりも気に入りました。しかし、カントは未解決問題を次々に提示してくるため、私は何年間も悩みました。それでもまだ、自分で哲学者になろうとは思いませんでした。カントやショーペンハウアーのような本を中心に読み漁るという意味でも、哲学を本職として自分で哲学書を著すという意味でも、そのような考えは浮かびませんでした。浮かんだとしても、そんな思いつきははねつけていたことでしょう。哲学的問題のいくつかには私は強くひきつけられましたが、自分にそれを解く力があるとは思いませんでした。ショーペンハウアーなどが説く哲学の体系は素晴らしいと感じましたが、同時に非常に野心的すぎると思いました。ショーペンハウアーの形而上学的な理論が真実であるとも思いませんでした。それに私は人に物を教えるといった実用的なことをしたかったのです。さらに、私にとっては物理学の問題のほうが魅力的で、また、ダーウィンの進化論は興味をかき立てると同時に、はるかに納得のいくものでした。こうしたことから、たしかに多くの哲学書を読みはしましたが、哲学を研究しようとはまでは思わなかったのです。イマヌエル・カント以外に、私が最も愛し、高く評価したのはギリシャ哲学者の中のいわゆるソクラテス以前の哲学者たちのグループで、とりわけヘラクレイトス、クセノファネス、パルメニデスが好きでした。また、同胞のアテネ市民500人からなる法廷で死刑を宣告されたソクラテスも好きで、高く評価していました。その抗弁を弟子のプラトンがまとめた『ソクラテスの弁明』は、私の知る限りでは、世界で最も美しい哲学書です。

教師になるうえで役に立つとあれば、家具の製作といった技術の習得にも力を注ぎました。私は実際に、オーストリア政府発行の家具製作者の免許を持っています。

家具を作っているときに、私はある哲学的問題の最初の解答を見出しました。問題とは西洋のクラシック音楽の体系、すなわち調性、和声、対立法の起源に関するものでした。私は解答を書き留めず、他人にも話しませんでした。しかし、50年後の1969年に自伝『果てしなき探求』の中の短い章にその解答を簡潔に書き記しました。この自伝は数年後の1974年に出版され、日本でも岩波書店から出版されています。

今年の5月に、私は驚くべき話を聞かされました。1919～20年頃に私が西洋音楽の起源について考えついた理論は、ドイツの有名な社会学者マックス・ウェーバーが同じ頃に発表した理論とほとんど同じだということです。当時私はウェーバーについては何一つ知りませんでした。ある専門家が言うように、私の自伝の1章に酷似しているというウェーバーの著作はいまだに見ていません。

こんな話をしたのは、これが私の人生全体の特徴のように思えるからです。（プラトンやソクラテス以前の哲学者に関する新たな歴史的理論に導いた）ギリシャの学問や科学分野でのささやかな成果や、哲学（認識論や現在の科学哲学分野、あるいは言語の起源や民主主義論といった社会・政治哲学）における成果はいずれも、「研究」といわれるプロセスを経て得られたものではありません。私の場合、それは次のようなプロセスを経たものでした。まず第一に対象を理解します。とても興味をそそられる問題の場合は、最初は表面的に、それから深く掘り下げていきます。そして時にはすぐに、時には何年もあとになって、別の分野の問題により興味をそそられるようになったあとでさえ、ある問題なり考えなりが具体的な形をとって現れ、本格的な研究が始まるのです。問題について真剣に考え、それを明確にしようと試み、単純化するのですが、新しい考えが浮かんだりしているうちに、問題の性格が大きく変化してしまうことがあります。仮の解答は覆されることがあります。本格的な研究を進めるうちに、問題の変化につれて、解答も大きく変化してしまうことがあります。

時にはすべてが私の頭の中の出来事で終わり、解答を書き残さないこともあります。あるいは、今お話ししたように、50年後に初めて解答を記録することもあります。あるいは研究の過程で何度も覚書を取ったり、図を作成することもあります。すぐに結論の出ることもありますが、それをすぐに発表することはありません。むしろ全然発表しないことが多く、友人や生徒に話すくらいがせいぜいです。でなければ友人に手紙を書き、批評を求めます。自分が到達した結論を何年間も忘れてしまうことがありますが、何と云っても困るのは、永

久に忘れてしまうことです。私は自分の研究方法を皆さんに勧めているわけではありません。むしろこのような冒険的な方法には頼らないようお願いします。

皆さんにはまねてもらいたくないのですが、私自身はこの方法でこれまでうまくやってきました。しかし、私の研究を献身的に手伝ってくれた亡き妻にとっては、私の研究方法は頭痛の種でした。私の研究方法は、頑張れば必ず成果が上がるというようなものではありませんでした。むしろ私は熱心に研究しましたし、私の妻も頑張ってくれました。全二巻の私の著作『聞いた社会とその敵』の例を話しましょう。私の90歳の誕生日を記念して、ドイツ語訳の改訂版が出版されたので、一とおりに目を通す必要がありました。全二巻に新たに補遺がついた1,000ページあまりの著作です。実に多くの素材や思想や主張が盛り込まれているのを見て、よくぞこれだけのものを書き下ろすことができたものだ、と感心しました。しかし実を言うと、私は内容をより明確で簡潔なものにするために22回も書き直したのです。私の妻は（古いおんぼろタイプライターで）初稿をタイプし、さらに5回も全文をタイプし直しました。2年と3か月を経て1945年によく出版されました。やはり私の研究方法はお勧めできません。また、私自身再び繰り返すこともできないでしょう。

最初の著作（英語版のタイトルは『The Logic of Scientific Discovery（科学的発見の論理）』）が出版されたとき、私は教師をしていました。初稿は1934年に出版された本の倍以上の長さがありましたが、出版社からはもっと短くまとめるように言われました。この本の基本的な思想は、1919年冬から1920年にかけて生まれたものでした。私はこの思想を14～15年かけて研究したことになります。当初は、出版しようという考えはまったくありませんでした。その経緯は次のとおりです。

1919年の6～7月、私はカール・マルクスの理論を激しく批判するようになり、その成否を合理的に判断するために徹底的に研究をし始めました。こうした重要な研究を行うことは、自分の義務だと思ったのです。私はまだ17歳で、当然ながら、私の発見に耳を貸してくれる人や、私の考えに関心を抱いてくれる人がいるなどとは期待していませんでした。したがって、私がマルクスの理論を人類に重大な危機をもたらすものであると考え、その成否を問う研究を始めたのは、自分を満足させるためでした。25年後に出版された『聞いた社会とその敵』は、このときの研究の成果を盛り込んだものでした。1945年の初版以来、再版を重ねてはいますが、マルクス主義とソ連帝国を崩壊させるほどの影響力

はありませんでした。今は亡き友人フリードリヒ・フォン・ハイエクの『隷従への道』といった有名な著作の影響に比べれば、取るに足りないものでした。ハイエクは今年3月に亡くなりました。

マルクス主義に対する批判的研究を開始したばかりの頃、1919年の冬から1920年にかけて、いくつかの問題に直面しましたが、何年も経ってから、それをもとに新たに三冊の本を出版しました。1934年に出版された一冊目の『科学的発見の論理』は出版された著作としては、最初のものでした。25年後には英訳ができました（完成した著作としては、これが最初ではありません。1933年から1979年までの46年間は出版されませんでした）。二冊目は『歴史主義の貧困』で、当初はハイエクが編集していたJournal Economicaに1944年から45年にかけて掲載されました。わずか10年後には単行本として出版されました。最初はイタリア語訳で、後に英語、その他各国語に翻訳されました。日本語訳は1961年に出版され、1965年と66年に改訂版が出ています。1960年代には、その他の著作の日本語版もいくつか出版されました。その後の日本語版についてはあまり知りません。この三冊はいずれも、17歳の私が1919年から20年にかけて行った研究を後日まとめたものです。どれも経験論、認識論、科学哲学に関する本です（二冊目の『歴史主義の貧困』は歴史と歴史科学の哲学に関する本です）。

それでは、これらの本を書くまでの経緯を簡単にお話しましょう。

前にも述べたように、私は批判的な視点からマルクス主義の研究を始めました。その目的はマルクスの主張の成否を確かめることでした。

マルクス、エンゲルス、レーニンがマルクス主義の体系が科学であると主張していました。これはマルクス主義が自然科学としての権威を持っているという意味であり、その下敷きにされていたのは、ニュートンの重力理論でした。自然科学の権威が揺らぎ始める何年も前のことで、こうしたマルクス主義の主張は極めて重要な意味を持っていました。当時、ある理論が科学の権威を持っているということは、それが真実であることを意味しました。さらに、それが真実だということを立証できるという意味でもありました。当時の西洋では、科学はたいへんな権威を持っていました。したがって、マルクス主義は科学である、もっとはっきりいうならば、科学的理論であるという主張は非常に重要な意味を持っていたのです。それは、マルクス主義が真実であるということの意味していたので、科学分野の専門家以外に批判しようとする者はいませんでした。

1919年秋、私は社会主義や共産主義が未来の世界を支配するという主張が真実かどうかという問題とはまた別に、マルクス主義が科学かどうかについて研究しようと決心しました（マルクス主義の主張がかなり疑問に思えたので、前者についても私は懐疑的になっていました）。

そこで私は何よりもまず、次の研究をしようと決めました。それは（私が高く評価する）ニュートンの重力理論がそうであるように、マルクス主義もまた科学であるといえるかどうかという問題でした。将来物理学の教師になりたい、と考えていた私にとって、これは興味深い問題でした。物理学の教師ならば、物理学や化学に科学としての権威を与える基準、すなわち自然科学と呼ばれるすべてのものに、純粋な科学としての権威を与えるものが何であるかを知っておくべきであると思ったからです。言い換えるなら、天文学を学問と認め、占星術を認めないのはなぜかということです。（嫌いな）マルクス主義に関する問題を（大好きな）物理学（それもニュートンの宇宙論）を含めた、より一般的な問題に置き換えて考えることはとても楽しいものでした。

この問題が私を科学哲学者にしたのであって、私自身は科学哲学者になるつもりはまったくありませんでした。

私はまだ17歳で、ウィーン大学数学研究所のメンバーであるとはいえ、こういった問題にはどう取り組めばよいのかわかりませんでした。そこで、私はそれについてただ考えることから始めました。これは古くから論議されてきた問題であって、大学の偉い教授なら誰でも、物理学者なら誰でも詳しく知っているはずだ、だから解答も知っているに違いない、と私は考えました。しかし、数学のセミナーで討議されるのは全然別の問題で、私の問題を提起する機会はありませんでした。学生仲間に話そうとしても（一人を除いて）誰も興味を示しませんでした。

私はまず、次のような特性づけを行うことから始めました。ある主張が科学に属するかどうかは、それを証明できる、あるいは明らかに正しい命題であることが必要となります。しかし、研究を始める前から私にはこの特性づけが不完全なもので、改良の余地があることがわかっていました。例えば、幾何学における有名なユークリッドの公理と公準と定義があります（当時、公理と公準はほとんど区別されていませんでした）。これらは証明できないとされていますが、明らかに幾何学に属しています。そして幾何学はまぎれもない科学です。また、ユークリッドは幾何学の基本中の基本でもあります。幾何学の他の命題

はすべて、ユークリッドの公理と公準と定義から派生したものです。

すぐに気づいたことですが、解答を求めて研究に取りかかる前に、問題を明確にするということだけのために、いわゆる経験科学や自然科学と呼ばれるもの、すなわち物理学、化学、生理学、地質学、地理学といった学問と数学を明確に区別しなければなりませんでした。

数学研究所で私は「公理」と呼ばれるもの、つまり公理体系の一般的理論について研究しようと思いました。この分野で最も偉大な学者がダーヴィット・ヒルベルトです。それから10年後、私は教員試験の論文のテーマに公理を選びました。

形式的な体系と事実を扱うこと、もつとはつきり言うならば、ニュートンやアインシュタインの重力理論など、事実として存在するものを説明することを目的とする理論の違いは、すぐに理解することができました。

私は最初に純粋数学と重力理論を比較し、次にニュートンの理論とアインシュタインの理論を比較しました。これらの理論とそれに対する異なる物理学者の主張を綿密に研究しました。このような研究を行ったのは、この問題に興味をかき立てられたからであって、自分で新境地を開拓しているという意識はまったくありませんでした。

当時はたとえ小学校においてさえ、教師になれる見込みはありませんでした。オーストリア帝国軍兵士として、第一次世界大戦に参加するには1歳若すぎ、教職はすべて、戦争や捕虜収容所から帰還した兵士の就職先となりました。

しかし、私は子供のための施設、特に孤児院などで、最初は無給でしたが仕事を見つけることができました。その後、運良くウィーン大学の学生を相手に、数学から心理学、哲学にいたるまでさまざまな分野の個人授業を行う機会を得ました。学生の中には米国からの留学生もいました。当時は米ドルの価値が高く、オーストリアの通貨の価値は非常に低かったので、こうした授業形態は双方にとって申し分のないものでした。これは、物の考え方を学ぶ絶好の機会でした（同時に教えない方法というものも覚えました）。

当時のウィーンでは、このような生活が当たり前でした。経済的にそうせざるをえなかったのです。1923年にウィーン市は、新設の教育研究所で研修を終えた者のみを教師として採用し、これを小学校教師にも適用するとの方針を発表しました。私のように教師を目指す者は皆、入学を申し込みました。この研究所はウィーン大学の付属機関でした。

当時、学生は自分で学費を払わなければなりませんでしたが、少なくとも私たちは研究所に学費を納める必要がなく、（薄給とはいえ）最終的には教職に就ける見通しがありました。

教育研究所で学んだ2年間はとてもおもしろい時期でもありました。私たちは研究所と大学の両方で研修を受けました。仲間の学生の中には、授業が厳しいと感じる者もいました。そこで私は研究所の理事に内緒で、そしてもちろん無報酬で、学生仲間を相手に授業をしました。空いた教室を利用して、大学の講義についていけない学生に講義やセミナーを行ったのです。大学では（コロキアと呼ばれる）中間試験がたくさん行われるので、そうした試験の準備にも私の授業は役立ちました。大学の教師の中ではただ一人、心理学者のカール・ビューラー教授だけが私の教師活動を知っていました。授業のために教授の研究室を使わせてくれるように頼まなければならなかったからです。後日、教授は手紙で、私の授業を受けた学生グループは、最高の成績を修めたと教えてくれました。

教育研究所で私は、中等学校でラテン語を教わらなかった学生を対象に、ラテン語の授業も行いました。当時、大学で学ぶ学生は全員、完璧とまではいかななくても、ある程度ラテン語に堪能でなければなりませんでしたが、成人した独身の学生にラテン語を教えることで、私は人間の言語についてさまざまなことを学びました。言語というものを考察するうえで極めて貴重な体験であり、ずっとあとになって、このときの体験を織り込みながら、人間の言語の起源に関する（大まかな）理論をつくり上げましたが、これについてはまだ発表していません。

教育研究所での研修を終えてからさらに5年を経て、ようやく小学校教師になり、その翌年には中等学校の教師になりました。この時期に数多くの論文を書き続け、1930年にはワードローブから溢れるほどの量になっていました。現在、科学哲学と呼ばれているものがテーマでした。これらの論文は、いまだかつて出版されていません。

1930年、小学校教師としてスタートするすぐ前に、私はヘルベルト・ファイグル教授に会いました。私と同じ年の元オーストリア人で、現在は米国で哲学教授になっており、哲学者のサークルであるウィーン学団のメンバーでもありました。教授はある晩、私の理論を聞き、それを本にまとめるよう言いました。そこで私は論文を書くのを中止して、本を書き始めました。これが1934年秋に『科学的発見の論理』を出版することになった原因です。

この本は、科学的認識論とその発展、私が後に大幅に改良した確率論、量子力学の批判的解釈（これについては後に他の学者によって重要なポイントがいくつか再発見されました）を叙述したものです。この著作は出版後、すぐに高い評価を得ました。評価されたとはいっても、もちろんそれは、ヒトラー独裁下でドイツの大学の荒廃が進み、戦争の脅威が迫りくる時代にあってもなおかつ、私の本のような抽象的な問題について考えることができたごく一部の人の間でのことでした。

それにもかかわらず、私はヨーロッパ諸国はもとより、米国でも高く評価されるようになり、ポーランドや英国、さらにはドイツの大学から講義に招かれました。一方、私が赴任していた学校の一部の国家社会主義的な教師や、強大な権力を持つ監督官からは脅迫を受けました。

そこで私は英国の大学の招聘を受け、英国に移住することに決めました。英国での講義は好評で、ウィーンの旧友B・P・ヴィースナーを通じ、哲学生物学者のJ・H・ウッドガー教授に会いました。ウッドガー教授はノーベル賞受賞者など多くの著名な生物学者が所属する理論生物学クラブの設立者で、リーダーでもありました。教授は、私が本の中で提唱した方法論を意識的に採り入れようとした最初の生物学者でした。1936年、ウッドガー教授は大英帝国で職を見つけるように勧め、ニュージーランドのクライストチャーチにあるカンタベリー大学付属カレッジが出した教授と講師の求人広告を見せてくれました。私はその両方に応募しました。

1936年のクリスマスイブ、ウィーンにいた私はニュージーランドからの電報を受け取りました。私は講師に採用されたのです。その2か月後、私と妻はウィーンを発ち、ロンドン経由でニュージーランドに向かいました。まだ飛行機のない時代で、私たちは5週間の船旅を大いに楽しみました。到着すると、カンタベリー大学付属カレッジの哲学科講師のポストに就きました。このカレッジは当時まだニュージーランド大学の一学部にすぎませんでしたが、現在はカ

ンタベリー大学と呼ばれています。

こうして私は一介の学校教師から、一度も研究テーマに哲学を選んだことがないまま、また、実際に哲学者になろうとしたこともなく、大学で教える本職の哲学者になったわけです。たしかに、ウッドガー教授の勧めに従い、クライストチャーチの教授職と講師職の両方に応募しました。しかしそれは職を得ようとしただけで、哲学者になろうとしたわけではありませんでした。それでも、最初の著作や講義が高い評価を得たことから、哲学者の素質があることは証明されていました。

では、どのようにして私は哲学者になったのでしょうか。私自身は哲学を研究しようと決めたことはありませんが、私に取り上げた問題はさまざまな分野を研究せざるをえない性質のものであり、その中に哲学があったのです。すべては私の愛する問題のおかげである、と言わねばなりません。私は最初の問題に心底惚れてしまいました。それはある理論の経験科学的特性の基準はどのようにしたら見つかるか、という問題でした。その解答を得ると、その他のさまざまな問題にも夢中になりましたが、その中には古代ギリシャ、すなわちホメロスやクセノファネス、パルメニデス、プラトンから現代のカント、ヘーゲル、マルクス、さらにはフルシチョフやゴルバチョフにいたるさまざまな歴史的な問題がありました。

私は、自分自身の研究方法を他人に勧めることはできません。むしろ、私のやり方をまねしないように注意したいと思います。しかしまじめな学生の方たち、特に科学を研究しているまじめな学生諸君は、心から愛することができて、その追究に一生を捧げられるような素晴らしい問題を見つけてください。そうした姿勢を持つことができれば、解答を求めて何度も挑戦を繰り返し、自分自身の努力を批判的な視点から見直すことが可能になります。多くの場合、成功というものは試行錯誤を繰り返さなければ、手にすることはできないのです。うまくいきそうなときでも、これで本当にいいのか、と自問自答することを忘れてはなりません。改良の余地は常にあるものです。アインシュタインは1905年から1915年にかけて、いわゆる相対性理論の一般化を試みていたとき（これにより相対性理論は幾何学的な重力理論となりました）、解答を出せそうな考えを数分ごとに捨て続けていたといえます。

私の友人で教え子のギュンター・ベヒターシュイザー（私はその膨大な理論的研究を過去10年間にわたって見守ることができました）は、無数の理論的考

えの一つ一つを批判しながら改良を加えていました。こうした方法のおかげで、ベヒターシュイザーは進化生化学の分野で前例のないほど多くの新しい発見をしました。人間のすることに誤りはつきものであることを常に意識し、自分自身を批判することを忘れないようにしながら、中心となる問題とそこから派生した問題、さらに周辺的な問題の追究に一生を捧げることに信念を持って研究に取り組む人々に対して、私が心の底から勧めたいことなのです。

最後にもう一つアドバイスをしましょう。ある解答を見出して満足したとしても、それが最終的な解答であるとは決して考えないでください。素晴らしい解答はいくらでも見つかりますが、最終的な解答というものはありません。どんなに素晴らしい解答でも誤っている可能性はあります。

この原則を相対主義の一形態と勘違いする人がよくいますが、相対主義とは全然反対のものです。私たちは真実を追い求めます。真実とは絶対的かつ客観的なものですが、虚偽もまた同じです。しかし、ある問題の解答が一つ見つければ、必ずそこからさらに深い問題が導き出されるはずなのです。

私のアドバイスが皆さんの創造的で幸福な人生の道しるべとなりますように。ご静聴ありがとうございました。